地域に伝わる話

人魚の話

伊勢の国、別保では、そのころ毎日のように漁が行われていた。
ちょうど、平忠盛が別保に来たときのことである。いつものように、漁師たちが網をひいていると、
「おっ、これはなんじゃ。」
とおどろきの声があがった。
「何や。人のように見えるぞ。」
「いや。さるのような顔をしているぞ。」
とその場は大さわぎとなった。
歯の細かいところは、魚のようでもあるが、顔は、人のようにも見える。横顔の口の出ているようなところは、さるにそっくりである。尾ひれのあるところなどは、魚とかわりがない。その上、漁師が近づいていくと、悲しそうにうめき声をあげるばかりか、なみだまで流す。
おどろいてばかりもいられず、さっそく、それを忠盛にさしだした。ところが、それを見た忠盛、
「これは、何たるものか。」
とおそれおののき、食べようとはしなかった。
漁師のもとにもどされた魚は、みんなに分けてあたえられた。勇気がいったが、食べてみても何ごともなかった。むしろ、味のよさに、取り合うようにして食べたということである。

中別保の地名の由来は、北に大別保、西に別保上野があり、その中間に位置することにちなみ、中世以降「別保」とも呼ばれていた。聖武天皇の伊勢僥倖に際し、天平 12 年（740 年）に行宮が置かれたとされている。伊勢平氏と関係が深く、「古今著聞集　巻第二十　魚虫禽獣第三十」には、平忠盛が別保へ来たとき、人魚を献上したと記されている。

影重産の名犬

永禄年間のことと言うから、400 年ほど前のことである。
今の美里町、長野氏の家臣に鹿間氏がいて、鹿間氏は狩を好んでいた。狩には、よい猟犬がいる。そこで、
「われに、名犬をあたえたまえ。」
と神仏に祈っていた。ところが、ある夜、夢枕に、
「汝、山に登り、犬のほえる声をしたって、その地に至るべし。必ずや名犬を得らる。」という声を聞いた。
目がさめると、遠く東の方角から、犬のほえる声が聞こえるではないか。たずね聞いていくと、別保村影重に、他にくらべるものがないほどの名犬がいるというではないか。ようやくたずねあててみると、評判通りの名犬であった。主人の許しを得てゆずってもらい、長野に連れて帰ることができた。それ以来、その犬とともに、狩猟の毎日であった。
数年がたった。鹿間氏の足どりも軽く、獲物も多かった。その時、犬が帰り道をじゃまするようにほえた。そればかりか、足をかまれた鹿間氏は、
「獲物の数、一千におよぶときは、猟犬、その主人をくらう。」
ということわざを思い出し、
「何をするか。」と、一刀のもとに犬の首をはねた。
カッと目を見開いた犬の頭は、数丁先の草むらまで飛んだ。ここにおいて、鹿間氏は、不思議に思い、草むらに言ってみると、大蛇が犬にくわえられてもだえている。それにおどろき、大蛇を切りころした。
「汝、犬ながら主人の恩を忘れず、一名を捨てて、わが命を救わん。おろかなり。汝の心を知らず、刀をくだしたり。」
涙を流しながら首をほおむり、犬塚を築いた。自らは、高野山に登り仏門に入り、碑を立てて供養をおこたらなかったと言われる。
犬塚は、今も長野峠のふもとの美里町平木にある。

影重は景重とも書かれ、江戸時代初期には、上野藩領、元和５年（1619年）からは、中別保村枝郷として紀州藩に所属した。影重には、永禄年間（1558～70 年）の出来事として、「影重産の名犬」の話が伝わる。

ざるやぶり

昔は夏と秋の2回の祭りがあった。夏はざるに麦を、秋は白米を神前にそなえて、終了後に、それを参拝者にわけた。今は祭礼は、7月14日、15日の夏祭りとなって、15日の夜は「ざるやぶり」神事が行われる。
氏子の青年を中心とする裸男たちが、神社の境内いっぱいに、体と体をぶっつけ合いもみ合いをして、ざるを破るという裸祭をくりひろげる。
この神事の由来は、三井高次一族が一色海岸にたどりついたことによるものである。「よまし麦」のざるを奪い合ったことをしのび、この神事が行われるようになった。当時の祖先を追憶し、豊漁と安穏無事を祈願するという祭礼である。

現在の神事は、神社から100メートル程離れた宿所（以前は北端家や集会所）に、裸男たちが集合し、午後7時30分の打ち上げ花火の合図とともに、4、5人ずつ組になって参道を「ワッショイ、ワッショイワーイ」の叫びをあげ、あたかも波が岸辺に打ち寄せるかのように、幾組も幾組もが、社殿に駆けこむ。5アール程の社の庭で、数十人程の裸の若者が、肌と肌をぶっつけ合って、もみ合う。その都度「ワッショイ、ワッショイ」の叫びとともに「ワーイ」のひとしお高い声があがる。
青年団幹部の団長、書記、会計の提灯が、それを統制する。一段と熱気は高まり、その裸男の集団には冷水が浴びせられる。
かくして、もみ合いは境内の外の参道までおよぶ。このさまは、網にかかった魚類が袋の中でピチピチとはね合うようである。約20分程して潮の引くように一たん宿所に引き揚げ小休止する。これが第1回のからねりである。

第2回は、また花火を合図に波状突進が行われ、社前でもみ合い、さらに拝殿の中でも祈るがごとくもみ合う。その都度「ワッショイ、ワッショイ、ワーイ」の叫びと喚声があがる。一面、いかにもこの神事に酔っているがごとく、人間の喜びの生の姿を神に捧げているかのようである。
さらに、花火が数発夜空を彩る。第1回より人数を増し、ひとしお熱気をおび、水をかぶせる、かぶる。それは勇壮である。約30分程してひく。

第３回は９時頃から最終のもみ合いになる。一段と熱気を増し、人の上に人がのしかかって一段と高まる。やがて、前日より白米を入れて、神前に献上してあった「たんばざる」（直径約６０センチメートルぐらい）を神社総代から幹部に渡すと、裸男たちが、お互いに引っ張り合い奪い合うために、ひとしお背高く、人の上に人がのし上がって騎馬戦のようである。
そして、ざるは、破られる、ちぎられる。

拝殿では、午後７時頃から神社総代をはじめ関係の方々が着座し、参拝者に答礼し、神酒を酌み、お神楽を奏して、地区の平和安全と氏子の無病息災を祈願する。特に、豊漁とその安全と発展を祈願するのはいうまでもない。
神前に供えられた白米が、参詣の人々に授与される。つぶされ、ひきちぎられたざるの竹の端は、かむと歯痛が治るということから、この小片を参拝者や観衆が持ち帰る。

この神事は、明治以降、盛衰をくり返し、時には、一時中断されたようであったが、ざるやぶりの衰退は漁業の衰退であり、漁獲量にかかわりあるものとして、漁民の願いを込めて、続行すべく関係者の努力が払われたので、近年益々盛んとなり、７月１５日は晴雨にかかわらず決行されている。

一色の八雲神社は弘治元年（1555 年）7 月 2 日、三井治郎左ヱ門高次が建てたものである。現在の棟札（長さ 6 寸 6 分）のうち最も古いものは、後に慶長 16 年（1611 年）に社殿を造営の時、針金でしばりつけたものと伝えられている。
三井高次は、有名な佐々木四郎の末裔である。紀州あたりを転戦の末、敗れて舟で逃れ、高次、高治の兄弟は 3、40 人の一族郎党とともに、豊津の海岸にたどりついたのは少なくとも弘治以前のことであろう。その頃、一色は千次浜といって中別保から移住した住家がわずか 3 軒であった。角政を 100 メートルほど下った角の、当時、保衛という家に榎の大木があった。海上よりこの大木を見て舟を着けたといわれている。民家に入ったがあたりに人影もない。空腹にたえかねた三井高次たちは、台所のざるに入れてあった「よまし麦」をむさぼり食べた。そこへ家人が帰って来て、たちまち大げんかとなったが、事情がわかって無事おさまり、三井高次らは、この地に住みつくことになった。

【参考資料】
「河芸町郷土史」
「一色の起源とざる破り神事」（一色社会文化振興会〔一色会〕、一色区自治会）

北向地蔵

地蔵盆の８月２４日には、北向（丸池）地蔵で、百万遍数珠送りが行われ、数多くの老若男女でにぎわう。直径3メートル程の大きな数珠を、参詣に来た人々が、円座になり、順番に手送りするものである。数珠送りは、近くの本昌寺（天台宗）では、初盆の供養として行われていたもので、当初は、本昌寺の数珠を借りて行われていたものが、地蔵盆の行事として定着したものである。

北向地蔵は、倉田医院の敷地内にあった頃から、「細野の地蔵さんに詣るまでもなく、病気や悩みを救ってもらえる」ということで、信仰を集めていた。名前の通り北を向いて立っていたのだが、当初の場所が三角地であり、狭いということもあって、現在の丸池の地に移された。丸池の地名は、かつて丸い池があったということに由来し、これ以来、北向地蔵、丸池地蔵とも呼ばれるようになった。

戦後まもない頃から、伊藤氏は、北向地蔵の世話をすることとなった。昭和２７年、北向地蔵横での防火用水の工事途中、地中から地蔵が現れて大騒ぎになった。掘り出された石を見ると、目、鼻があり、地蔵の面影があるというのである。そこで、地蔵を抱いて帰り、塩で清めた。当時の祠は小さかったため、伊藤醤油店に、この地蔵はあずけられることになった。

別紙由来書は、昭和３９年、この祠の増築をした際にしたためられたもので、この時以来、この地蔵も、祠の西端に安置されている。現在の祠は、多くの協力によって建てられたもので、昭和６２年８月２３日に落慶法要が行われ、この時には、稚児行列も行われている。

北向地蔵には、不思議なことが数多くあるという。そのため、白子や四日市からも、地蔵盆には参拝者がある。病気を治してもらえるということだけでなく、自転車が飛んでしまうような交通事故にあったのに、前後の車輪の間に体が入っていて救われたというようなことも伝わっている。